

皆さんの「追い風言葉」は何ですか?

「#言葉の逆風」に打ち克つ言葉・出来事

2024年度、#WeChangeの取組の中で目玉となったのは「#言葉の逆風」プロジェクトでした。約20のメディアで、この取組についての取り上げられました(右:「主要メディア掲載一覧」)して。

#WeChangeで最重要視している構成員の意識改革を目的として行われた「#言葉の逆風」プロジェクトでは、まず、「なぜ東京大学には女性が少ないのか?」という問いを掲げたポスターを学内に掲出しました。その約2週間後、その答えの1つとして「#言葉の逆風」と名づけた「ふだん何気なく女性たちに浴びせているが、ジェンダー・バイアスが潜んでいる言葉」を散りばめたポスターを学内に掲出しました(詳細はこちらから:<https://wechange.adm.u-tokyo.ac.jp/ja/news/512/>)。

「#言葉の逆風」の取組にはおおむねポジティブな反応をいただき、「よく可視化してくれた!」や「この言葉たちを逆風って感じていいんだ。」という声が特に女性から多く届きました。それらの反応の1つとして、学内の有志が登録しているSlackチャンネルで、「言葉の逆風に打ち克った言葉や経験も教えてください!」という投稿が自発的にされました。その投稿にリプライする形で、数名の方がご自身の経験を共有してくださいました。「#言葉の逆風」プロジェクトを始動前にも「逆風となった言葉だけではなく、逆風に打ち克つための前向きな言葉もあるはず!」とメ

ンバーで話していたのですが、そのような「追い風言葉」たちが自主的に集められたことに感動を覚えました。

そして、本誌2ページ目でも報告していますが、12月4日に行った「#言葉の逆風を考える——脚本家・小説家 吉田 恵里香氏 × 東京大学理事・副学長 林 香里 対談」では、学内外から約110名の方にご参加いただきました。参加者の皆様から「追い風言葉」を集めるコーナーを会場に設置しました(右上写真)。「逆風言葉はすぐに思いつくのに、追い風言葉ってなかなか思いつかない…」という感想もいただいたように、ペンを持ったまま固ってしまう様子も多く見受けられましたが、イベント終了時には「#言葉の逆風ポスター」が「追い風言葉」で埋まっていました。

「どんなあなたでも応援しているよ」
「やりたいときがやりどき」
「自分の生き方、価値観を決めるのは自分自身です」

逆風言葉は熟読すると精神的にも疲弊してしまいそうですが、その上に貼られた前向きな「追い風言葉」に、私たちもパワーをもらいました。人々の可能性を奪ってしまうような「#言葉の逆風」が吹き荒れる社会ではなく、自分の可能性を信じて背中を押してくれるような「言葉の追い風」が吹き続ける社会になるよう、これからもジェンダー・バイアスの是正に取り組んでいきたいと思えます。



- ▶ハフポスト
「虎に翼」の世界はまだ現役だった。
「男だらけ」の東大で女性たちが浴びる言葉の逆風、改革プロジェクトが始動
2024年5月20日
- ▶共同通信 / (47NEWS)
ポスターで「女子なのに東大?」学内に掲示、性別偏り意識改革へ
2024年5月20日
- ▶読売新聞
「女子なのに東大?」「女子は研究に向いていない」…意識改革へ東大がポスター
2024年5月21日
- ▶朝日新聞
「女子が大学院?」学生・教員が浴びる言葉の逆風、東大がポスター
2024年5月21日
- ▶毎日新聞
「なぜ東京大学には女性が少ないのか?」学内のポスターで問いかけ
2024年5月21日
- ▶Abema Prime
なぜ東大に女性が少ない?ポスター企画者に聞く
2024年5月27日
- ▶(現代ビジネス編集部) | 現代ビジネス
「東大女子」が絶句…入学直後に「男女の格差」を痛感させられた「衝撃のスピーチ」の中身
2024年5月29日
- ▶ABEMA TIMES | アベマタイムズ
「女子なのに東大?」「#言葉の逆風」ポスター企画者の想い「言われる側も“これは逆風だ”と思っている」
2024年5月29日
- ▶NHK
東京大学「言葉の逆風」ポスターを掲示 男女比の偏りは正へ
2024年6月1日
- ▶東洋経済オンライン
なぜ東大女子は少ない?知られざる卒業生の本音
「高学歴女子への逆風」を乗り越えるヒント
2024年6月2日
- ▶日本経済新聞
「なぜ東大は女性少ない?」ポスターで問いかけ
2024年6月3日
- ▶Women Type
「旦那さん優しいね、働かせてくれて」女性のキャリアを阻む「言葉の逆風」が吹いた時の処方箋
2024年6月4日
- ▶NHK東海
【特集】KYジャーナル#言葉の逆風
2024年6月6日
- ▶NHK
東京大学で女性の意欲をそく無意識の差別を考える催し
2024年6月24日
- ▶日本経済新聞
「女子が大学院?」偏見なくせ 東大や東北大 実態可視化、啓発急ぐ
2024年9月23日
- ▶The Japan Times
Women at Japan's top university call out gender imbalance with posters
2024年10月10日
- ▶日本経済新聞
東大、無意識の偏見でイベント 脚本家・吉田氏と議論
2024年12月5日

「#言葉の逆風を考える

脚本家・小説家 吉田 恵里香氏 × 東京大学理事・副学長 林 香里対談」開催

20 24年12月4日（水）に東京大学情報学環・福武ホールにて、東京大学ジェンダー・エクイティ推進オフィス主催「#言葉の逆風を考える—脚本家・小説家 吉田恵里香氏 × 理事・副学長 林香里 対談」イベントを実施しました。

NHK連続テレビ小説『虎に翼』の脚本を担当された吉田恵里香氏と本学国際、ダイバーシティ&インクルージョン担当理事・副学長の林香里の対談ということで、ジェンダー問題に関心のある約110名の方に学内外からご参加いただきました。また、「#言葉の逆風」プロジェクトの担当者である当オフィスの安東特任研究員がモデレーターを務めました。

「#言葉の逆風」プロジェクトについて紹介した後、「#言葉の逆風」プロジェクトと『虎に翼』の共通点や『虎に翼』で印象に残ったシーン、ジェンダー問題を発信す



ることの意義と難しさについて吉田氏と林理事・副学長の対談が行われました。最後に、これからの社会に願うこと、参加者の皆様へのメッセージについてそれぞれからお話いただきました。対談内容については、こちらのイベントレポートでも発信しております。白熱した議論の様子をぜひご一読ください。



女性教員幹部養成プログラム ネットワーキングイベント開催

20 24年12月9日、多様性包摂共創センター ジェンダー・エクイティ推進オフィスは「#WeChange 女性教員幹部養成プログラム ネットワーキングイベント」を開催しました。情報学環・福武ホール ラーニングシアターに、学内の様々な部局から推薦された49名の女性教員が集まりました。

イベントの冒頭では、林香里 理事・副学長と、部局長経験者である森初果教授（物性研究所）、本郷恵子教授（史料編纂所）が、田野井慶太郎 ジェンダー・エクイティ推進オフィス長のモデレートのもと、座談会を行いました。

その後、ワールドカフェ形式で5人前後のグループでディスカッションを実施。東京大学を良くしていくためのアイデアを話し合いました。途中メンバーを変えて3回話し合いを行い、様々な意見をグループ内で共有し

たのち、グループごとに話し合われた内容を発表しました。

そこでは、「ダイバーシティ委員会などは女性教員が担当することが多い。誰もが入る委員会にしていくといいのでは」「女性学生がなぜ増えないかといえば、居心地よくないという問題がある」「ロールモデルを見せていく必要があるが、一度研究から離れてもまた戻れるなど、様々な人生あることをアピールできるといい」「日本語が母語ではない構成員向けの発信がもっと必要」など様々な提案が出ました。

その後の懇親会でも議論は尽きないようでした。参加者からは「普段知り合えない先生方とお話しできて有意義でした。女性学生、女性教員を増やす方法についても、自分では気が付かない視点がたくさんあることがわかりました」「正直に申し上げると3時間を空けるのはつらいなあと思っていましたが、実のある楽しい回でした」などの感想が寄せられました。



「スキルコース ネットワーキングイベント」開催

2024年6月から開催している教員・博士課程学生向けの研究支援コース「ワークライフバランスを重視する研究者のためのアカデミアキャリア構築スキルコース」では、9月26日に対面でネットワーキン



グイベントを開催しました。

様々な研究分野の背景を持つ15名が参加しました。イベントでは、自己紹介ののち、「子育てと研究の両立」「モチベーションを維持するには」というテーマでグループディスカッションを行いました。「ライティングチャレンジで一緒にいる先生方と実際にお会いしてお話させていただくことができ、とても励みになりました」「少しでも育児と研究が両立しやすい大学での環境づくりをさらに進めていく必要があると感じました」等のご意見をいただきました。

日仏女性研究者のネットワーク形成イベント「Women in Science」開催

2024年10月25日、ジェンダー・エクイティ推進オフィスでは、フランス国立科学研究センター(CNRS) Gender Equality Unitとの共催により、ジェンダーをテーマとしたシリーズの1回目のイベント「Women in Science」をオンラインにて開催しました(使用言語:英語)。イベントでは、女性研究者が直面しているさまざまな課題に光を当て、キャリア形成

とワークライフバランスの両立等への認識を共有し、理解を深めました。参加者はCNRS・東大を中心に計150名あり、活発な議論がありました。



2024年度ジェンダーエクイティ研修 「多様なケア労働への理解ある 職場を目指して」実施

2024年9月11日～10月31日の受講期間の受講者は13,554名で受講率は76.6%でした。学内限定で、東大TVにて研修動画を公開しています。学内限定公開、ログイン必要: https://tv.he.u-tokyo.ac.jp/lecture_6259/

「UTokyo Women+ 研究者ネットワークを作ろう!」開催

2025年2月7日「UTokyo Women+ 研究者ネットワークを作ろう!」を開催しました(オンライン)。今年度はテーマ別でディスカッションする場を提供することで、日頃抱えている悩みや思いについて参加者間で情報やアイデアを共有する機会を作りました。学内から約45名が参加しました。

他大学への訪問

各大学のDEIの取組を学び、情報交換をするために・エクイティ&インクルージョン推進センター(2025年1月27日)、九州大学男女共同参画推進室(2025年2月18日)、長崎大学ダイバーシティ推進センター(2025年2月20日)を訪問しました。

2024年度A Semester 学術フロンティア講義 「ジェンダー・イノベーション入門」 (お茶の水女子大学・東京大学・ 東北大学連携オンライン集中講義) 開講



「ライフサイエンス研究の ダイバーシティ多面的な研究、 多様なキャリアパス、 多彩な研究者」開催

2024年9月30日(月)、東京大学多様性包摂共創センターおよび産学協創推進本部は、一般社団法人ライフサイエンス・イノベーション・ネットワーク・ジャパン(LINK-J)との共催で女性活躍支援イベント「ライフサイエンス研究のダイバーシティ多面的な研究、多様なキャリアパス、多彩な研究者」をハイブリッド形式にて開催しました。



Northwestern 大学関係者来訪

2024年12月12日、Northwestern 大学Buffet研究所よりJennifer Tackett教授、Haoqi Zhang准教授が来訪し、情報交換を行いました。

台湾大学関係者来訪

2024年12月20日、国立台湾大学からTheresa Der-Lan Yeh教授(Gender Mainstreaming Center for Higher Education所長)、Chin-yen Chen教授(Advisor of our Gender Mainstreaming Resource Center)が来訪されました。林香里理事・副学長、伊藤たかねセンター長(IncluDE)、小川真理子副オフィス長(IncluDE、ジェンダー・エクイティ推進オフィス)、同オフィス久保京子特任研究員、中野円佳准教授(IncluDE、DEI共創推進戦略室)と情報交換を行いました。



IARUジェンダー・グループ会合の実施

2024年9月23日～25日に、IARUジェンダー・グループ会合が、オックスフォード大学でハイブリッド形式で開催されました。IARU加盟の計10大学が参加しました。本学からは、小川真理子副オフィス長(IncluDE、ジェンダー・エクイティ推進オフィス)が参加しました。オックスフォード大学のジェンダー・エクイティ推進の取組を中心に学び、参加大学と意見交換を行いました。本学の#WeChangeの取組について発表し、IncluDEの創設についても紹介しました。また今後のジェンダー・グループ会合の方向性についても議論しました。

「部局女性人事5ヵ年計画 意見交換会」実施

2024年6月10日・17日、9月30日・10月4日、2025年1月21日・24日に「部局女性人事5ヵ年計画意見交換会」を実施しました。

役員研修の実施

昨年から始まった、役員等を対象とする対面ワークショップ型のD&I研修を、理解の深化と継続的な意識付けを目指して、本年度も実施しています。役員・部局長向けには2024年9月10日(火)、副理事・本部部長・事務(部)長向けには9月27日(金)に実施しましたが、9月10日は前後の会議の関係で時間が限られたため、前半のみとし、後半を2025年3月4日(火)に開催する予定です。

30% Club Japan 大学グループ シンポジウム実施

2024年11月27日、本学 藤井輝夫総長がチェアを務める30% Club Japan 大学グループと、TOPIX社長会のパートナーシップ・プラットフォーム企画第1弾となるシンポジウム「トップマネジメントと語ろう、グローバル時代のビジネス・キャリア」が、昭和女子大学と30% Club Japanの共催で開催されました。



2024年度A Semester 学術フロンティア講義 「ジェンダーを考える」開講



今後の予定

- 講義の開講（ジェンダー関連講義）2025年度Aセメスターに開講予定
- 2024年度学術フロンティア講義「ジェンダーを考える」一部OCWにて公開予定
- 2025年度ワークライフバランスを重視する研究者のためのアカデミアキャリア構築スキルコース参加者募集中

2025年度「ワークライフバランスを重視する研究者のためのアカデミアキャリア構築スキルコース」の参加者を4月4日（金）まで募集しています。論文等の執筆をメンバー同士で励ましあう「ライティングチャレンジ」や研究での人脈形成について学ぶ「メンタリ

ング・マップ・ワークショップ」など、アカデミア初期の研究者、子育てや介護などのケアを担っている研究者など、時間に余裕のない研究者にとって、様々な場面における活動を効率化するためのプログラムをご用意しております。ぜひ応募ください。



キーワードで学ぶ
男女共同参画

（国際女性デー International Women's Day）

国連は、多くの「国際デー（International Days）」を定めています。これは、特定の日にひとつのテーマを設定することで、国際社会の関心を喚起し、取り組みを促すことを目的としています。女性に関する国際デーは「国際女性デー」（3月8日）です。国際女性デーは、女性の権利と政治的、経済的分野への参加に対する支援を共に盛り立てていくきっかけになっており、毎年、世界では様々な女性の権利のためのイベントが行われています。

「国際女性デー」は、もともとは、北米とヨーロッパで起きた女性労働運動に端を発したものです。日を定めて、女性の権利を訴え、

祝う動きは1900年代の初頭からみられました。アメリカ合衆国では、1908年にニューヨークで女性労働条件の改善を訴え、投票権を求めるストライキを起こしたことに起因して、1909年2月28日に「全米女性の日」の記念行事が行われました。1910年、ドイツでは、第二回国際社会主義女性会議で、政治家・女性解放運動家であるクララ・ツェトキンが「毎年すべての国で同じ日に祝賀行事を開催し、女性の要求を訴えるべきだ」と、現在まで続く「国際女性デー」を提唱し、1911年3月19日に初の「国際女性デー」行事が行われました。こうした活動の流れを受けて、国際

婦人年である1975年の3月8日に国連で提唱され、その後、1977年の国連総会で議決されました。

国際女性デーは毎年特に重視するテーマが決まっています。2025年のテーマは「Accelerate Action（アクションを加速させる）」です。世界経済フォーラムによると、このままのスピードでは、男女平等が実現するまでに、5世代、134年かかるだろうと推計されています。一人ひとりが、男女平等の「加速」を意識して、世界的に進歩の速度を上げていくことが求められているといえるでしょう。

参考文献

・国際連合広報センターウェブサイト「国際女性の日（3月8日）制定に至る歴史とは」https://www.unic.or.jp/news_press/features_backgrounders/23089/

・International Women's Day公式サイト「History of International Women's Day」<https://www.internationalwomensday.com/Activity/15586/The-history-of-IWD>

データで読み解く東大のジェンダー

「東京大学進学を勧めたのは誰？」（多様性包摂共創センター ジェンダー・エクイティ推進オフィス 久保京子）

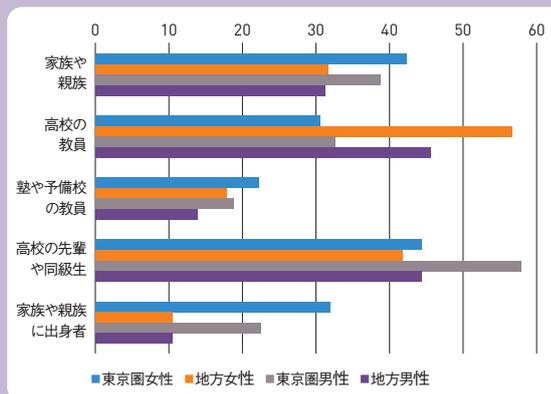
高校生の東京大学進学において、地方の女性が不利ということがよく言われる。その原因として浪人回避、資格重視、地元志向などが指摘されている（江森 百花・川崎莉音著『なぜ地方女子は東大を目指さないのか』光文社新書）。ここでは、東京大学の卒業生に行ったアンケート調査（以下、卒業生調査）から、東京大学進学を勧めたのは誰か、そして、それは地方と東京圏、男性と女性でどのような違いがあるか、について見ていこう。

卒業生調査には、東京大学（大学院は除く）に進学した理由を尋ねる設問がある。いくつかある項目のうち、誰が勧めたか、あるいは周りの東大生や東大卒業生がいたか、に関する項目に着目し、回答者を地方女性・地方男性・東京圏女性・東京圏男性の4類型にわけて集計した。その結果（やや当てはまる、当てはまるの合計）を図表に示す。結果からわかるのは、①家族や親族に東大進学を勧められた、家族や親族に東京大学出身者がいるのは東京圏の男女一特に女性で多い、②高校の教員に勧められたのは地方の男女一特に女性で多い、③先輩や同級生に東京大学出身者がいるのは東京圏男性で突出して多

い、ということである。東京圏女性は身近に勧められる人や、東大生がいるが、地方女性の場合は（今回のアンケートの項目についていえば）、高校の教員が重要であることがわかる。

本学は学部学生から教員まで女性が少ないため、女性構成を増やすことが課題のひとつである。し

東大に進学した理由(%)



かし、特に学部学生において女性を増やすために、高校生にアプローチをするとき、地方女性と東京圏女性では、そのバックグラウンドがかなり異なることに留意しなければならないだろう。（本田由紀 編著『「東大卒」の研究—データからみる学歴イリート」ちくま新書（近刊）第一章「地方出身東大女性」という困難』（久保）より、データを再分析して掲載）

調査名：「東大卒業生のキャリアに関する調査」（代表者：本田由紀教授（教育学研究科））
対象：東京大学卒業生（調査は大学院修了者も対象としているが、本分析では学部卒業生のみを対象とした）
質問文は「あなたが東京大学に入学した理由として、以下のことはどれほど当てはまりますか。」

項目（本分析でとりあげたもの）は「家族や親族に勧められたから」「高校の教員に勧められたから」「塾や予備校の教員に勧められたから」「高校の先輩や同級生が東大に進学していたから」「家族や親族に東京大学の出身者がいたから」。選択肢は「まったく当てはまらない」「あまり当てはまらない」「やや当てはまる」「とても当てはまる」